

『徒然草寿命院抄』の注釈態度

*1) 島内裕子

要旨

本稿は、徒然草の最初の注釈書である『徒然草寿命院抄』を取り上げて、そこで行われている注釈について考察するものである。『徒然草寿命院抄』は、現代にいたるまでの徒然草研究史の上で、非常に重要な注釈書あり、その後の多くの徒然草注釈書に踏襲されてきた。けれども、『徒然草寿命院抄』の個々の注釈が、何によってどのように付けられているか、その特徴や注釈態度については、いまだに十分な研究がなされてきたとはいえない。

『徒然草寿命院抄』は、徒然草の原文の中から、語句や固有名詞を取り出して、その意味や説明を、さまざまな典拠によりながら注釈している。本稿では、特に『源氏物語』『枕草子』『八雲御抄』によって付けられた注釈に焦点をあてて、『徒然草寿命院抄』の注釈態度を探ってみたい。『徒然草寿命院抄』が、『八雲御抄』によって徒然草の語句を説明していること、および、そのような注は徒然草の上巻に集中していることは、徒然草の表現が、特に上巻において歌語と深くかわっていることを示している。また、『徒然草寿命院抄』の注に『枕草子』を引用する箇所がいくつもあるのは、正徹による徒然草理解とも一脈通じるところがある。さらに、『徒然草寿命院抄』においては、とりわけ『河海抄』による注釈が多いが、このことは、徒然草の表現や執筆姿勢が、いかに『源氏物語』に多くをよっているかを示すことになる。

はじめに

『徒然草寿命院抄』（以下『寿命院抄』と略す）は、徒然草の最初の注釈書である。秦宗巴がまとめたもので、慶長九年（一六〇四）に古活字本で刊行された。『寿命院抄』には、まず徒然

草の作者や内容に関する五箇条の総論と卜部系図が掲げられ、その後に、徒然草から主として難語や固有名詞などが抽出されて、注釈が施されている。しかしこの注釈は語釈に限らず、内容に踏み込んで『源氏物語』や『枕草子』などとの関連を説く箇所もある。『寿命院抄』では徒然草の原文は、注釈箇所を切り出す形で書かれているので、原文の全文は掲載されていないが、

注釈は全体にわたってほぼ万遍なくいつてよいほど施されており、最初の注釈書としては、かなり詳しいものとなっている。

徒然草の注釈としては、『寿命院抄』の刊行に先だって、徒然草の原文行間に簡単な注を書き込んでいる細川幸隆本徒然草のような写本があることが知られているが、『寿命院抄』と比べるとこれらは簡略であり、また、総論にあたる部分もない。したがって、徒然草注釈書の嚆矢は、やはり『寿命院抄』であると言えよう。

現代にいたるまでの徒然草研究において『寿命院抄』が果たした役割はきわめて重要であるにもかかわらず、本書の意義はまだまだ十分には究明されていないように思われる。もちろん、徒然草の注釈を行う際の基盤となる資料として、『寿命院抄』は現代の研究者にとってもその意義は十分に認められているが、翻って『寿命院抄』に記載されている個々の注釈自体が、いったいどこから生まれているのか、あるいは、『寿命院抄』の冒頭に掲げられている五箇条の総論は果たして妥当であるのかといった再検討が、あまりなされないまま、近世の徒然草注釈書以来、次々に『寿命院抄』の説が踏襲されてきているように思われる。

『寿命院抄』の総論も再検討すべきではないかということについては、かつて多少触れたことがあるので、本稿では、『寿命院抄』の注釈について具体的に検討することによって、その注

釈の成り立ちを考察してみたい。『寿命院抄』における『源氏物語』の注釈書の引用、特に『河海抄』の存在は注目に価する。

徒然草の注釈が『源氏物語』の注釈書に多くを依っていることは、何を意味するのだろうか。また、『枕草子』や歌字書による注釈は、徒然草のどのような側面を解明することになるのだろうか。

一 『寿命院抄』の依拠資料としての『八雲御抄』

『寿命院抄』の注釈の特徴としては、徒然草の表現の典拠・出典を博搜して明示していることであろう。『寿命院抄』の依拠資料を大別するとすれば、漢籍・仏典・和書・和歌であるが、以下の本稿では、考察の対象を和書・和歌に絞ることとする。

『寿命院抄』において、書名を明示したり和歌を引用したりしてある注釈箇所を、内容的に分類してみると、おおよそ次のようになる。

- ① 『源氏物語』およびその注釈書による注釈
- ② 『枕草子』による注釈
- ③ 『八雲御抄』による注釈
- ④ 引歌を指摘する注釈
- ⑤ 辞書類による注釈
- ⑥ 有職故実書による注釈

⑦ その他の説話・歴史書・伝記などによる注釈

以上の七項目のうちで①の分量が最も多く、語釈だけではなく、徒然草執筆姿勢の指摘にも及んでいる。②は主として執筆姿勢に関わり、③は主として語釈に関わる。

本稿では、まず『寿命院抄』における語釈の方法を考察するために、『八雲御抄』による注釈から概観しよう。

徒然草は古来、上下二冊の写本で伝来してきたが、『寿命院抄』において『八雲御抄』による注釈は上巻に集中している。注釈箇所は、言葉の意味の説明がほとんどであり、二例は徒然草第一四段の歌学に関するものである。このことから、『八雲御抄』による注釈は語釈が中心であることがわかる。それぞれの注釈について、いくつか具体的に見てゆきたい。

語釈の例は、第一段の「ヒタフル」、第三段の「アフサキルサ」、第七段の「コヨナウ」、第一九段の「六月祓」、第二四段の「神ユフ」、第四九段の「ツカノマ」、第五〇段の「ハヤク」、第一一三段の「アルシセント」などである。これらはすべて『八雲御抄』の第三と第四に記載されている言葉である。

『寿命院抄』では、『八雲御抄』の記述を適宜簡略に抜き書き、注釈として使用しているのである。たとえば、第一段の「ヒタフル」の注釈は、次のように書かれている。

ヒタフル ヒタスラト云同心也。一向ト書。
八雲抄ニヒタケル心ナド云タルハ、一向又フテタルヨシ

也。

み吉野のたのむの雁もひたふるに……^②

『八雲御抄』の第四・言語部には、次のように書かれている。ひたふる（ながくと云（心）也。永とかけり。一向とも心うべし。在源氏也。源氏にも、ひたふる心などいひたるは、一向又ふてたるよし也。なべて此心にいふ。されど本説は永なり。）^③

『寿命院抄』に引用されている部分と、『八雲御抄』の語釈が完全に一致しているわけではない。ただし、『八雲御抄』は伝本も多いので、今引用したものよりもっと一致度が高い写本があるかもしれない。

第三段の「アフサキルサ」や第七段の「コヨナウ」の注釈では、『八雲御抄』だけでなく、『源氏物語』やその注釈書も引用している。たとえば、「コヨナウ」の注釈は次のように書かれており、『八雲御抄』と『河海抄』の両方が挙げられている。

コヨナウ 八雲ニ、事外也トアリ。河海ニ無越、閑雅、幽玄ノ義也。カギリモナクト云心也。

『寿命院抄』の注釈は、これに引き続く徒然草注釈書『野槌』『なぐさみ草』は言うに及ばず、現代の注釈書にまで踏襲されることが多い。『八雲御抄』による語釈は、『野槌』と『なぐさみ草』に受け継がれている。また、現代の注釈書でも「アフサキルサ」「六月祓」「ツカノマ」の注釈が使われている。

次に、徒然草第一四段に書かれている「臥猪の床」と歌道観について、この二つの出典を考えてみたい。第一四段は、徒然草の中でも唯一といってよいほど、和歌に関するところが書かれている章段である。この段はまず次のように書き出されている。

和歌こそ、なほをかしきものなれ。あやしめしづ・山がつのしわざも、言ひ出でつればおもしろく、恐ろしき猪のししも、「ふす猪の床」と言へば、やさしくなりぬ。⁴

傍線を付した部分が、『八雲御抄』によることは、『寿命院抄』で指摘されて以来、現代の注釈書でも踏襲されている。『寿命院抄』の注釈を掲げよう。

ヲソロシキ猪ノシ、モ 八雲抄ニ、寂蓮法師ガ云ケルハ、ウタノヤウニイミジキ物ナシ。イノシ、ナドイフヲソロシキ物ヲモ、フスイノ床ナドイヒツレバ、ヤサシキナリ。マシテヤサシキ物ヲ、ヲソロシゲニイヒナス、無下ノ事也。

第一四段においても一箇所『八雲御抄』との関連が指摘されているのは、次の部分である。

歌の道のみにしへに交らぬなどいふこともあれど、いさや。今も詠みあへる同じ言葉・歌枕も、昔の人の詠めるは、さらに同じものにあらず。やすくすなほにして、姿もきよげに、あはれも深く見ゆ。

この部分について、『寿命院抄』では次のように注釈されている。

る。

歌ノ道ノミイニシヘニカハラヌ 八雲抄ニ、西行ガ夢ニモ、イヅレノワザモ、ヲトロヘ行ニ、タゞ此道バカリ末代ニ絶ベカラズトミヘタリ、トイヘリ。

この注釈は、『野槌』や『なぐさみ草』ではそのまま受け継がれているが、北村季吟の『徒然草文段抄』では、この部分に関して、『八雲御抄』ではなく、『新古今和歌集』の西行の和歌の詞書を引用している。次に『八雲御抄』と『新古今和歌』の当該箇所を掲げて比較してみたい。

されば、中比にもすぎ、いにしへ〔に〕もおよぶべき道は歌也。しかあれば、西行が夢にも、何のわざもおとろへゆくに、たゞこの道ばかり、末代にたゆべからずと見えたりといへり。

〔『八雲御抄』第六・用意部〕

寂蓮、人人すすめて百首歌よませ侍りけるに、いなび侍りて、熊野にまうでける道にて、夢に、なにごともおとろへゆけど、このみちこそ世のするにかはらぬものはあれ、なほこの歌よむべきよし、別当湛快三位俊成に申すとみ侍りて、おどろきながら、この歌をいそぎよみいだしてつかはしけるおくに、かきつけ侍りける

西行法師

するのよもこのなさけのみかはらずとみしゆめなくはよそにきかまし〔『新古今和歌集』・巻第十八・雑歌下・一八四

四^⑤

それぞれ傍線を付した部分を比べてみると、どちらかといえば『新古今和歌集』の詞書の表現の方が、徒然草の表現に近いように思われる。おそらくそのことよって、北村季吟は『八雲御抄』ではなく、『新古今和歌集』を出典としたのであろう。現代の注釈書でも、この部分に関しては、『新古今和歌集』と『八雲御抄』を併記することもあるが、『新古今和歌集』を第一の典拠とするものが多い。

ただし、徒然草第一四段自体は、むしろ『八雲御抄』第六・用意部の全体と深くかかわっているのではないかと考えられる。用意部は、順徳院の和歌観が披瀝されている巻である。歌を詠むことは教えられるのではなく、自分で心得なくてはならないこと、和歌の言葉によいも悪いもなく、ただ続け柄によって、よい歌にもなり悪い歌にもなることを述べた後に、先ほど触れた「ふす猪の床」のことが書かれている。その後には『梁塵秘抄』が引用されていることに注目したい。徒然草第一四段でも、「梁塵秘抄の郢曲の言葉こそ、また、あはれなることは多かれ」とある。『八雲御抄』では、『梁塵秘抄』（現在では散逸してしまった部分）に書かれている「まことのよきうたよみになりぬれば、やすやすとありのまゝの事とこそきこゆれ」という和歌観を取り上げているので、徒然草第一四段で『梁塵秘抄』の言葉がすばらしいと述べているのとは異なるが、『八雲御抄』

の用意部に『梁塵秘抄』という書名が明示されて引用されている事実に注意しておきたい。この点に関して、久保田淳氏も『徒然草評釈』三十九の語釈で、『八雲御抄』用意部に『梁塵秘抄』の書名が見えることに注意を喚起している。

徒然草第一四段と『八雲御抄』用意部との関連はこれにとどまらない。第一四段では紀貫之の「糸によるものならなくに」の歌が『古今和歌集』の歌屑であるとする伝承を紹介した上で、異議を唱えている。この部分は、従来の研究でも兼好が何によって書いているのか典拠が不明とされている。ただし、『八雲御抄』用意部の最後で、和歌評や歌人評も時代によって変わることを述べて、公任はかつて二百年にわたって「天下無双の歌人」とされてきたのに「近比より、公任無下なりといふ事出きて、あさくおもへる輩少々あり」と書いている。そしてそれに続けて「貫之（も）さしもなしなどいふ事少々きこゆ」とある。

このように見てゆくと、徒然草第一四段に書かれている兼好の和歌観と『八雲御抄』用意部との類似性が目立つ。もちろん兼好が第一四段を『八雲御抄』によって書き進めているとまでは言えないだろうが、第一四段で取り上げている話題が『八雲御抄』用意部といくつかの点で重なっているのは確認できるのではないだろうか。「ふす猪の床」、貫之への評価、西行の詞書、『梁塵秘抄』への言及という四点が、すべて『八雲御抄』用意部にも書かれているからである。したがって、徒然草の「歌の

道のみにしへに変らぬなどいふこともあれど」という表現だけに着目して、より一致度が高いものを求めると『新古今和歌集』の詞書になるかもしれないが、第一四段の冒頭部の「ふす猪の床」との関連や『梁塵秘抄』への言及などを考え合わせると、「歌の道のみにしへに」の部分の典拠は『新古今和歌集』よりも『八雲御抄』とした方が、より兼好の執筆心理に即したものとなるのではなからうか。

『寿命院抄』に記載されている注釈を手掛かりにすれば、徒然草第一四段を書き進める兼好の脳裏をよぎっていたものが垣間見られる。それが『八雲御抄』用意部であり、兼好はおそらくこの用意部に書かれている順徳院の和歌観を咀嚼した上で、みずからの和歌観を吐露したのではなからうか。ただし、順徳院の場合は、一時衰えていた歌の道が自分の時代に再び隆盛になったことを述べているのに対して、兼好の場合は、あくまでも時代の推移につれて和歌が衰退していることを歎いているので、基本的な見方は異なる。けれども、第一四段で兼好が先に挙げたような四点に触れているその源泉は『八雲御抄』の用意部によっているのではないかと推測したい。

『寿命院抄』に見える『八雲御抄』による注釈は徒然草上巻に集中し、しかも語釈に関するものが多い。このことは、徒然草の上巻において歌語が占める割合が大きいことを示しているよう。また、第一四段で展開されている兼好の和歌観と、『八雲御

抄』の関連も深いことがわかるのである。

二 『枕草子』による注釈

『寿命院抄』には、『枕草子』によって注釈を付けている箇所がある。徒然草には『枕草子』と直接関わる章段として、第一段・第一九段・第一三八段の三章段がある。『寿命院抄』では、これらの段だけでなく、徒然草の表現や内容についても広く『枕草子』との関連を指摘しているので、それらを順次見てゆきながら、『寿命院抄』の注釈態度の特徴を考えてみたい。

まず第一段の「人には木の端のやうに思はるゝよと清少納言が書けるも、げにさることぞかし」に対して、『寿命院抄』では、『枕草子』の該当部分を引用して、次のように注釈している。ただし、清少納言の略歴には触れていない。

清少納言ガ書モ 清少納言枕草紙ニ、オモハン子ヲ法師
ニナシタランコソ心クルシケレ。タゞ木ノハシノヤウニラ
モヒタルコソ、イトイトラシケレ。サウシ物ノアシキラウ
チクヒテイヌルヲモ、ワカキハ物モユカシカラン、女子ナ
ドノ有所ヲモ、ナドカイミタルヤウニテ、サシノゾカズモ
アラン、ソレヲモヤスカラズイフ、マイテケンジャナドハ、
イトクルシゲ也。

この注釈は、林羅山の『野槌』にそのまま踏襲されているが、そこでは清少納言の略歴を加えて、「肥後守清原元輔が女。一條院の皇后につかへし女房也」としている。松永貞徳の『なぐさみ草』では、この略歴だけが踏襲され、『枕草子』の該当原文の引用はない。

徒然草第八段には直接『枕草子』のことは書かれていないが、表現の背後に『枕草子』を重層させている。「匂ひなどは仮のものなるに、しばらく衣裳に薫物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心ときめきするものなり」という部分に関して、『寿命院抄』では「枕草子ニ、ヨキタキ物タキテ、ヒトリフシタルト、心トキメキスル物ノタグヒニ入也」と注している。『枕草子』では、「心ときめきするもの」としていくつか列挙する形式で書かれている中に、「よき薫物たきて、ひとり臥したる」と書かれている。この場合は女性が自分自身で感じる嗅覚を描いているが、徒然草では、男性が女性に感じる高揚感として書かれている。薫物と心ときめきが結び付いて使われているので、『寿命院抄』の指摘通り、おそらく兼好もここを書くにあたっては『枕草子』を念頭に置いていよう。この注釈は、現代の注釈書にも受け継がれている。

次に第一九段について『寿命院抄』は、「此段、枕草子、源氏

物語ナド、所くヲトリテ書タル也」としている。また、この段の「すさまじきものにして見る人もなき月の寒けく澄める、二十日余りの空こそ、心ほそきものなれ」の部分に関して、『寿命院抄』は、『枕草子』との関わりを指摘するが、『枕草子』の原文に該当箇所が見当たらないことを次のように注している。

スサマジキ物ニシテ見ル人モナキ 枕草子ニ、スサマジキ物ノ内ニシハスノ月ヲノセタリト云伝タリ。今一両本ヲミルニ無之、可考之。

これに続けて『源氏物語』の朝顔巻を引用した上で、次のように『源氏物語』の注釈書である『河海抄』を引用しているのが注目される。『寿命院抄』と『河海抄』との関連については後述するが、『枕草子』の原文に見られない記述が『源氏物語』の注釈書に書かれており、それがさらに徒然草の注釈に使われているのは興味深い。

河海ニ、清少納言枕草子ニ、スサマジキ物、シハスノ月夜、オウナノケサウ、嫗老女也。此外、宇治ニ、数所シハスノ月ノ事アル也。十列冷物、十二月月夜、扇等アリ。

先に、『枕草子』にすさまじきものの例として師走の月を載せていると言い伝えられているが、原文に見当たらないので「可考之」とであると『寿命院抄』が書いていたのは、『河海抄』によってこのような注釈を付けたのであろう。

徒然草第二四段は、書き出しは齋宮についてであり、「なかぞ」
「染紙」などの忌み言葉を挙げた後で、「すべて、神の社こそ、
捨て難く、なまめかしきものなれや」として、伊勢以下梅宮ま
で十一の神社を列挙する段である。『寿命院抄』はこの段につい
て、『枕草子』を引用しながら次のように書いている。

コトニオカシキハ 枕草子ニ、神ニ、松尾、ヤハタ、大
原野、春日、イトメデタシ。平野ハイタヅラヤノアリシヲ
何スル所ゾトヒシニ、御コシヤトリトイヒシモ、イトメ
デタシ。ミコモリノ神又オカシ。賀茂更ナリ、イナリ。此
枕草子ノ筆パウニテ書タルヤウ也。

『寿命院抄』では『枕草子』を注釈に使う場合、このように
徒然草の書き方が『枕草子』に類似している箇所を指摘するこ
とが多い。

徒然草第二九段については、表現の類似箇所として、『寿命院
抄』は『枕草子』を挙げている。

シヅカニオモヘバ過ニシカタノ恋シサノミ 枕草子ニ、
過ニシカタ恋シキ物、カレタルアウヒ、ヒイナアソビノテ
ウド、又オリカラ哀ナリシ人ノフミ、ツレ ナル日サガ
シ出タル。

この注釈も、現代の注釈書に踏襲されている。

徒然草第三二段は、現代の注釈書でも『枕草子』との関連が
指摘されているが、『寿命院抄』でも、「此段、ヤサシキ風情前
段ニ同ジ。枕草子ヲ以テ書タリ」として、『枕草子』の類似する
場面を引用している。この場面はやはり九月のある夜、男性が
訪れた女性の家から帰る際の情景が描かれ、徒然草第三二段と
よく似ている。ただし、この箇所は前田家本『枕草子』には見
られない。徒然草における『枕草子』との関連が指摘される場
合、『枕草子』は前田家本で示されることが多いので、この場
面に『枕草子』との関連を指摘することは是非は再考を要するの
ではないだろうか。徒然草における『枕草子』の本文について
は、今後より詳しい研究が必要となろう。

『寿命院抄』の注釈で注目されるのは、この段の最後に「ソ
ノ人ホドナクウセニケリ」の部分に関して、次のように書いて
いることである。

其人ウセタリト書テ、枕草子ヲアタラシクトリナシテ、又
哀モナヲ一入深クオボユル也。

つまり、この指摘は、ただ単に徒然草と『枕草子』の表現の
類似を言うのではなく、兼好が『枕草子』を念頭に置きながら
も、類似の状況をまた違った角度から描いていることに注意を
喚起しているのである。このような指摘は、『野槌』や『なぐさ
み草』にはなぜか受け継がれず、『野槌』では『枕草子』の類似
箇所の原文を引用するに留まっているし、『なぐさみ草』ではこ

の原文引用もなく、第三二段と『枕草子』との関連性は全く顧みられていない。

『寿命院抄』では、徒然草第四三段に関しても『枕草子』との関連性を「此段、又枕草子ノ面カゲニテ書タリ。不及考之」と述べている。第四三段はある晩春に兼好が見知らぬ家とその住人の風情にひかれたことが書かれている段である。「春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、賤しからぬ家の奥深く木立もの古りて、庭に散り萎れたる花見過しがたきを、さし入りて見れば」と書き出され、文体も情景もまるで王朝文学のような章段である。ただし、この段についても『野槌』と『なぐさみ草』は『枕草子』に全く触れていない。この二書は、『寿命院抄』の注釈をほとんどの場合踏襲しているにもかかわらず、『枕草子』との類似について『寿命院抄』の注釈を受け継がないのは不審である。もともと『寿命院抄』でもここに関しては、具体的に『枕草子』の原文を挙げてはいないが、第四三段と『枕草子』の雰囲気類似性には注意している。

徒然草第七〇段では琵琶の名器「玄上」の注の部分で、『寿命院抄』は「枕草子ニ、玄上、牧馬、井尹、渭橋、無名ナドアリ」と、『枕草子』に触れている。

徒然草第一〇四段は、「荒れたる宿の人目なきに、女の憚るところにて、つれづれと籠り居たるを」と書き出される段で、ある男性が久しぶりに女性の家を訪れ、一夜を明かしたことが、初夏の清新な季節感と相俟って描かれている。この段に関しては現在までに、『源氏物語』との関連がいくつも指摘されているが、『寿命院抄』のこの段の注で『源氏物語』については言及していない。そして、「此段、スベテ此人ノ物語ヲ書タル体也」として、この段の語り手である男性を主人公として書いているとまず指摘している。そして「夜深き鳥も鳴きぬ」という表現について、『寿命院抄』では「清少納言ガ枕草子ノ面影アリ」と注している。この段に『枕草子』の面影を認める注釈書はあまりなく、『野槌』も『なぐさみ草』も『枕草子』のことには触れていない。『徒然草文段抄』でも「源氏物語などの筆法をうつして風流を書けり」として、この段全体の雰囲気には触れているが、『枕草子』ではなく、『源氏物語』の筆法としている。

ただし、『寿命院抄』ではこの段に続く第一〇五段の注で、「以上ノ二段ハ、優ニヤサシキ者也。源氏枕草子ノ面カゲ誠作物語ノ筆法ノ眼目アラハレタリ。大カタニ思テ、心ヲ付ザランハ兼好ガ本意無念タルベキ歟。」と述べて、ここで『源氏物語』との関連に触れている。『寿命院抄』は、このようにただ単に語句の注釈を付けるだけでなく、そこを書いた「兼好ガ本意」にまで注意を払っているのが注目される。このような注釈態度が『寿

『命院抄』の特徴の一つと言ってよいだろう。『命院抄』よりも早い時期の細川幸隆本徒然草には、原文の行間に簡単な注が付いているが、『命院抄』のように、兼好の趣旨にまで思いを致して、個々の表現を吟味することは行われていない。

『命院抄』の注で『枕草子』に触れている箇所として、次に第一一三段を取り上げよう。この段は、人間が自分にふさわしくない態度を取ることに對する兼好の痛烈な批判が書かれている段である。四十歳を過ぎた人間が自分や他人の恋愛体験を話題にすることへの批判から始まり、聞きにくく見苦しいこととして、老人が若い人に混じって面白がらそうとしゃべること、大したこともない人間が世間で時めいている人といかにも親しくしているように言うこと、貧しい人が酒宴を好み饗応しようとする、以上のことが批判されている。『命院抄』では次のように注を付けている。

四十二モアマリヌル人 此段、ニゲナクミグルシキ事ヲアラハセリ。トリワケ老人ノ心モ多シ。枕草子ニ此類多シ。

この注は、徒然草第一一三段に書かれている内容に對して、まず全体の主旨は「ニゲナクミグルシキ事」つまり、その人にふさわしくない見苦しいことが書かれているとまとめた上で、特に老人のことが多いとしている。ただし、ここで挙げられている四例の内、直接老人のことが書かれているのは、前半の二

例であり、後半の二例は老人のこととは限らない。それにもかかわらず、この段で書かれていることの中心を老人のこととしているのは、『命院抄』独自の捉え方であり、この注は『野槌』や『なぐさみ草』には踏襲されていない。けれども、このような解釈は『文段抄』には見られる。『文段抄』では『命院抄』の書名は出していないが、やはりこの段の主旨を、「とりわき老人のうへをいふ事重し」と述べ、「おほかた聞きにくく、見苦しきこと」以下の原文について、「これより枕双紙の文法にて、聞にくく見ぐるしき事どもを書つらねたり」と捉えている。

『命院抄』は、冒頭の総論にあたる部分でも「草子ノ大体ハ清少納言枕草紙ヲ模シ」と述べていたが、徒然草を『枕草子』と関連付けて解釈することが特徴の一つである。このことは、徒然草享受史の中では、正徹の徒然草理解と重なり、心敬のそれとは異なることを意味する。すなわち、正徹は『正徹物語』で二箇所にわたって、「つれづれ草のおもふりは清少納言が枕草子の様也」「つれづれ草は枕草子をつぎて書きたる物也」と述べている。これに對して、心敬の場合は、徒然草の原文への言及は正徹よりも多いにもかかわらず、徒然草を『枕草子』と関連付けて解釈することはない。正徹が直接触れている徒然草の原文は第一三七段の冒頭だけであることと、正徹が徒然草と『枕草子』の類似性に触れていることとは、相互に関連があると考

えられる。すなわち、正徹は徒然草を美意識にかかわる文学作品として理解しているのである。一方で心敬は、徒然草を人生論の書物として理解していたから、『枕草子』との関連には注目していないのではないだろうか。『枕草子』を人生論の書物とする読み方は従来なく、『枕草子』には人生の無常は直接書かれていない。その『枕草子』と関連付けて徒然草を理解した正徹の立場と、徒然草の中からとりわけ無常観に関わる箇所を取り上げて、自分の著作に人生論として摂取している心敬の立場は、根底において異なると考えられる。

徒然草第一三八段は、ある人が葵祭が過ぎて葵の葉をすぐに捨てさせたのを見た兼好が、王朝時代の和歌や文学作品の中から、葵の葉は枯れるまでそのままにしておくべきではないかということを例証した段である。その例の中に『枕草子』が出てくる。『枕草子』にも、来しかた恋しきもの、枯れたる葵と書けるこそ、いみじくなつかしう思ひ寄りたれ」と書いている。徒然草に『枕草子』の書名が直接出てくるのは、先に取り上げた第一九段とこの第一三八段の二箇所だけである。そのほかに清少納言の名前を出している段に第一段があった。第一三八段の『寿命院抄』の注では、「枕草子 清少納言作、三冊アリ」と簡単に書いているだけである。

徒然草第一七〇段の注にも『枕草子』のことが出てくる。この段は、特別な用事もないのに他人のところに出席して行って長居するのはよくないことをまず書いた後、それとは逆に、同じ心持ちの人のと語らいのよさを述べ、最後に手紙の場合も何も用件がなくても、久闊を辞するだけのものもよい、と締めくくる。この最後の部分に関して『寿命院抄』では次のように注を付けている。

フミモ久シクキコエバナド斗 是モ用事ナクテ音信斗
ノ文ハ、時メキタルイソガハシキ所ヘハ、可有斟酌事也。
清少納言枕草子ニ、サハガシウ時メキタル所ニ、ウチフル
メキタル人ノ、ヲノガツレ／＼トイトマオホカルナラヒニ、
昔オボエテ、コトナルコトナキ歌ヨミテオコセタル、スサ
マジトアリ。此詞、可了見互見者也。

この注の付け方は、『寿命院抄』における今までの『枕草子』による注とは異なる点が注目される。すなわち、今までの注は、徒然草の表現の典拠として『枕草子』の類似箇所を指摘するか、または、徒然草の書き方が『枕草子』の書き方と似ているという指摘であった。しかし、ここでは、徒然草に書かれていることを、『枕草子』によって相対化している。徒然草第一七〇段で兼好は、これといった用件もない手紙のよさを書いているのであるが、そのことに対して『寿命院抄』は、異を唱えている。つまり、そのような手紙を出すのも場合によりけりであること

を『枕草子』を引用して述べているのである。忙しい人に暇な人間が、自分の暇つぶしのためにつまらない和歌を詠んで手紙を出すのは、興ざめであるという『枕草子』を引用している。

以上、『寿命院抄』に見られる『枕草子』による注釈を通覧してきたが、これによってわかったことは、『寿命院抄』が、徒然草と『枕草子』の関連性をかなり重視していることである。個々の断片的な語句の関連ももちろん指摘しているが、それよりも重要なのは、徒然草の書き方が『枕草子』と類似していることを具体的に指摘している点である。それは正徹の徒然草観と共通する面があるとともに、正徹の段階ではまだ具体的に挙げられていなかった『枕草子』との関連箇所を明示し、徒然草を研究的に読む態度が一步進められたことを意味する。

三 『河海抄』による注釈

『寿命院抄』の注釈の特徴として、『源氏物語』と関連させて徒然草を考察する点が挙げられるが、その中でも特に、『源氏物語』の注釈書である『河海抄』が重要な役割を果たしている。以下の考察では、この『河海抄』による注について取り上げるが、『八雲御抄』や『枕草子』の場合と異なり、『河海抄』による注の数は非常に多いので、本稿では徒然草冒頭部から第九段

あたりまでを取り上げ、それによって、『寿命院抄』における『河海抄』の役割を考えてみたい。

『寿命院抄』は、その総論にあたる部分で、徒然草が「多クハ源氏物語ノ詞ヲ用」いていると書いているが、注釈を見てゆくと実際に『源氏物語』を引用しながら注を付けている箇所が多い。この注の付け方の特徴を考察することから、『寿命院抄』における『源氏物語』の役割が浮かび上がることになるうし、その作業は、徒然草の文学作品としての特徴にも新たな光をあてることになるう。

『寿命院抄』は、注を付ける部分の徒然草の原文をその箇所だけ切り出しているが、その際に原文も注も漢字片仮名混じりで記述している。ただし、なぜか徒然草の冒頭から第一段の「一人」までに限っては、切り出された原文は、漢字平仮名混じりで記述されている。『寿命院抄』では、段落番号が付いているが、現在通行の番号とは多少異なる。現在序段とされている部分は、第一段とまとめて一つの章段とされている。まず、序段（『寿命院抄』では第一段）の「そこはかとなく」について、次のように注している。

そこはかとなくとはソコトモナク也。はかハ付字也。

神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞかなしき
「そこはかとなく」という表現に対して、その意味をまず記

し、和歌を一首掲げている。和歌の初句の右肩には「引」という文字が付いており、これが引歌であることを示す。ところで、なぜ徒然草で使われている「そこはかとなく」という表現に対して、この和歌を挙げているのであろうか。作者は藤原高光で、この歌は『高光集』に収められているが、『新古今和歌集』巻第六・冬歌・五五二番にも入集している。確かに八代集の和歌の中で「そこはかとなく」が使われている歌はこれのみであるが、そのことだけが注に揭げている理由であらうか。「そこはかとなく」という徒然草の言葉に対して藤原高光の歌を引歌とする必然性について推測してみよう。

『源氏物語』の柏木巻に「そこはかとなく物をのみ心細く思ひ」という表現がある。『源氏物語』の注釈書『河海抄』を繙いてみると、この部分に対して、先の高光の歌が掲げられているのである。『寿命院抄』では、この部分の注で『源氏物語』や『河海抄』のことには直接触れていないが、おそらく「そこはかとなく」という表現の意味や使われている背景を考えるにあたって、『源氏物語』での用例を参照し、その注釈書である『河海抄』に掲げられている藤原高光の和歌を、徒然草の注に使用したのであろう。

次に、徒然草第一段の「やんごとなき」の注を見てみよう。
やんごとなき ホメタル詞也。又上臈ヲヤンゴトナキ人

ト云。源氏桐壺ノ巻ニ、やんごとなきハにハあらぬがとアリ。花鳥ニやむごとなきトハ、キハメテ上臈ノ品ヲ云トアリ。無止ト書タリ。

ここでは「やんごとなき」という言葉に対して『源氏物語』桐壺巻にその用例があることを指摘し、その部分の注を一条兼良の『花鳥余情』から引く。『寿命院抄』全体を通して見ると、『源氏物語』の注釈書を引用する度合としては『河海抄』が最も多く、このように『花鳥余情』を引用することは少ない。しかも、桐壺巻のこの部分について『河海抄』にも、「いとやむごとなきにはあらぬが 無止事也又無停事(也) 花容無止 万葉」とある。ここでは「やんごとなき」の意味を漢字で示しているが、『花鳥余情』のように、身分がきわめて高いことをあらわすという意味自体の説明は書かれていないので、より詳しい注が付いている『花鳥余情』を引用したのであろう。

やはり徒然草第一段に見える言葉で「はふれにたれど」に関して、『寿命院抄』では「ハフレニタレド、ハ、ヲチブレタレド、云事也」と言葉の意味を注した後に、「身は捨つ心をだにもはふらさじ終にはいかゞ成と知べく」の歌を引歌として挙げている。これは『古今和歌集』巻第一九・雑体・一〇六四番の藤原興風の歌である。この歌も『河海抄』で、夕顔巻の「かゝるみちのそらにてはふれぬべきにや」の注に、「古今にも身はすてつ心を

だにもはふらさじとあり」と書かれているのと関連があるろう。

さらに『寿命院抄』では今取り上げた注に続いて、「ナマメカシ ヤサシキ心也」とした上で、「秋の野になまめきたてる女郎花……」と『古今和歌集』巻第一九・雑体・一〇一六番の僧正遍昭の和歌の上句を引用している。これも『河海抄』の桐壺巻の「なまめかしく」の注に「秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一時」とあるのを使って、徒然草の表現の注としていえると考えられる。

徒然草第一段で、増賀聖の言葉を引用しながら書いている部分で、「ひたふるの世捨人はなかなかあらまほしきかたもありなん」とある。この部分の注については、先に『八雲御抄』について考察した時にすでに触れたが、ここでは「ひたふる」の意味の説明として、『八雲御抄』が引用されていることを確認したのであったが、この箇所注には、『八雲御抄』にはない「み吉野のたのむの雁もひたふるに……」という和歌の上句が引用されている。「ひたふる」に対してこの和歌を掲げるのは、やはり『河海抄』と関連があるろう。すなわち、桐壺巻の「ひたふるに」の注に、この歌が引用されているからである。『河海抄』では、まず「ひたふるに」について「敢死」「一切」「永迅」などの漢字をあてて意味を示し、次いで「みよしのゝたのむの雁もひた

ふるに君がかたにぞよるとなくなる 伊勢物語」という和歌を示し、その後「八雲抄云ながくといふ也ひたふるは一向又ふてたるよし也 案之ひたすらなどいふ心歟」とある。したがって、『寿命院抄』の「ヒタフル」の注だけを見ると、この部分が『八雲御抄』にるように思われるが、実際はむしろ『河海抄』の桐壺巻の「ひたふるに」の注によって書かれているのではないだろうか。

第一段の「品カタチコソ生レツキタラメ……」についての注では、『源氏物語』帚木巻の原文を長く引用して、次のように書いている。

シナカタチト心ヲ評論シタル結句也。所詮心ニ帰スル義也。
源氏ハ、キ木ニ、イマハタゞ品ニモヨラジカタチヲバサラ
ニイハジ。イトクチヲシクネジケガマシキヲボエダニナク
ハ、物マメヤカニシヅカナル心ノヲモムキナランヨルベヲ
ゾ、ツキノタノミ所ニハヲモヒラクベカリケリトアリ。

花鳥ニ、三界唯一心源氏一部ノ肝心ト釈セリ。此文ノ心ニ
相叶ヘル歟。

ここでは、徒然草に書かれている言葉の意味の注ではなく、『源氏物語』に描かれている場面との関連を指摘している点が、今までに見た注と異なる。

また、第一段の「テナドツタナカラズハシリカキ」の注では『河海抄』を引用して、書体についての注を付けている。

河海集ニ曰真ノ字ハ人ノ衣冠タ、シキ体也。行字ハアリク体也。草字ハ人ノ走レル体也ト云々。

これは、帚木巻の注を使っている。『寿命院抄』ではこの注に続けて、「真・行・草」の書体に関する蘇東坡の言葉を『事文類聚』から引用している。なお、この蘇東坡の語句は、一条兼良の『語園』にも引用されている。

徒然草第三段の注で「アフサキルサニヲモヒミダレ」に関しては、『八雲御抄』によってこの言葉の意味を注しているが、『源氏物語』帚木巻にも触れて、「源氏ハ、キ木ニ、トアレバカ、リアフサキルサニテ」と原文を引用した後に、「シカリトテトスレバカ、リカクスレバアナヒシラズアフサキルサニ」という和歌を挙げている。

『八雲御抄』ではこの言葉について、「とするもかゝるも也。古今、源じ、同心也」と書いているので、それによって『源氏物語』の該当箇所や『古今和歌集』の該当歌を挙げた可能性もある。あるいは、『河海抄』でも、「とすればかゝりあふさきるさにて」の注として、

そへにととすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに 古今

八雲抄云あふさきるさとはとするもかくするも也云々

とあるので、『寿命院抄』の注は『八雲御抄』ではなく、『河海抄』によっている可能性も高い。

徒然草第三段の「ヲカシケレ」の注として『寿命院抄』は、「夕顔巻ニ、ナキ給サマイトヲカシ。世俗ニ人ヲ嘲弄シテヲカシキト云其ウラ也」と書く。このような一語についても、わざわざ『源氏物語』の用例を挙げているのは、『寿命院抄』が、徒然草の用語をいかに『源氏物語』と関連付けて解釈しているかを示すものである。

第七段の注で、『源氏物語』やその注釈書と関わる部分は三箇所ある。まず、「アダシノ野ノ露キユル時ナク……」を取り上げて、次のような注を付けている。

アダシ野ハアナガチ名所ニアラザル歟。アダナル心斗ニ歌ニモヨム也。アダシ心ナドノ類也。サレドモ河海ニ承暦ノ歌合ニ、嵯峨野ヲ過テアダシ野マデユケンモアデキナシト云リ。是ハ名所タルベキ歟。私云嵯峨ノ奥ニ、ヲクマンガラト云墓所アリ。此所ナルベシ。

この注では、まず「あだし野」を地名とせず、あだなる心の象徴とし、その後、『河海抄』の書名を出して、承暦歌合の判詞に引用されている「嵯峨野を過ぎてあだし野まで行きけむ

もあぢきなし」を根拠として、この場合は名所であるとする。さらに秦宗巴自身の注として、嵯峨野の奥にある「ヲクマンダラ」という墓所のこととする。

この部分を『河海抄』と照らし合わせてみると、「アダシ野ハアナガチ名所ニアラザル歟」と始まる注の前半部からすでに、『河海抄』の手習巻の注に書かれていることと重なっていることがわかる。すなわち、『河海抄』の「あだしの」の注は、次のように書かれており、あだし野が名所ではなく、あだなる心の象徴であると書かれているのである。

承暦哥合にさが野をすぎてあだしのまでゆきけんもあぢきなしといへり是名所歟又野宮哥合判云あだしのいて「二字真本強名」たかゝらねばにやあらんあり所しれる人すくなし云々 清輔朝臣抄には名所げにみえたれどもたゞあたる事によせていへる歟あたし心などいふ鉢歟

『河海抄』の注と比べると、書かれている内容の順序は異なるが、明かにここで書かれていることを参考にして『寿命院抄』は徒然草の注を付けている。なお、『八雲御抄』第五「名所部」の「野」の最後に、あだし野について、「あだし野は、清輔抄には、名所げにいひたれども、たゞあだなる事によせていへる也。源氏の歌にも見えたり。たゞあだし心などいふ鉢か。但、猶名所之由有所見」として、承暦歌合・野宮歌合の例を挙げている。この例の中で、「判詞云、あだし野は名だかゝらねばにやあらん、

ありどころしる人すくなしといへり」と書かれている部分を見ると、先に引用した『河海抄』で「あだしのいて「二字真本強名」たかゝらねばにやあらんあり所しれる人すくなし」となっていて意味が不明瞭であったのが、よく通じる。この部分の『河海抄』の注は、『八雲御抄』を参照しているのであろう。

徒然草第七段で「あだし野」は、「鳥辺山の煙立ち去らでのみ」と対比されているので、現代の注釈書では地名とするが、これらの古い注釈書を見ると、「あだし野」は地名とは特定されていなかったことがわかる。ただし、高田宗賢の『徒然草大全』では、「鳥部山と対にかきたればたしかに名所に見たき所なり今嵯峨の奥あたごの麓に化野といふ墓所あれば承暦の歌合に嵯峨野を過てあだし野まで行けんもあぢきなしといふにかなへり」という解釈が示されている。^⑤

次に第七段の「コヨナウ」の注として、『八雲御抄』から「八雲二、事外也トアリ」と引用していることは先述したが、それに続けて『河海抄』からも「無越閑雅幽玄ノ義也カギリモナフト云心也」という箇所を引用している。これは桐壺巻の注で、『河海抄』の当該箇所には、次のように記述されている。

こよなう 無此世 無越奥入 閑雅是は幽玄之義也各別心歟

八雲抄曰うるせくものゝまさりたるなどいふ鉢也はるかに

といふ心に狭衣にもいへり源氏には多事外也よく見る
にたゞ事外也たとへばうるせくも同事也

ここでも『河海抄』自体が『八雲御抄』によりながら注を付けていることがわかる。『八雲御抄』第四・言語部では、「こよなく」について、「無越」「閑雅」などの言葉は挙げられておらず、これらが挙げられているのは『河海抄』の方であるので、『寿命院抄』の注釈は、『八雲御抄』と『河海抄』の両方によって書いたとするよりも、『八雲御抄』も取り込んで書いている『河海抄』によって注釈を施したと考えた方がよいだろう。『寿命院抄』における『河海抄』の役割の大きさを示す注である。

徒然草第七段に対する『寿命院抄』の注は、もう一つある。

「タノ日ニ子孫ヲ愛シ」の部分である。この注は「朝露貪名利夕陽愛子孫白氏文集秦中吟」とあるだけだが、この注も『河海抄』などの『源氏物語』注釈書と深い関連があると考えられる。

徒然草のこの部分が『白氏文集』によるという指摘は、すでに細川幸隆本徒然草の書き入れ注において、「朝露貪名利夕陽愛子孫 白氏文集」とある。『寿命院抄』でも幸隆本でも「夕陽愛子孫」となっている。『白氏文集』のこの詩句を徒然草第七段の「夕べの陽に子孫を愛して」という表現の直接の典故としてよいように考えられるが、『白氏文集』の原文では、「夕陽愛子孫」であり、「夕陽愛子孫」という本文はないという。したが

って、もし兼好が『白氏文集』に正確に依拠しているのなら、「夕べの陽に子孫を愛して」ではなく、「夕べの陽に子孫を憂ひて」となってしまうべきであろう。その点に着目して、この部分の典故を『白氏文集』ではなく源信の『観心略要集』とする注釈書もある。⁷⁾しかしながら、『観心略要集』でも表現はやはり二通りあり、「唯是朝露之底貪名利。夕陽之前憂子孫」となっている本と、「唯是朝露之底貪名利。夕陽之前憂子孫」となっている本があり、注釈書によってまちまちに引用されている。そのことに關して、久保田淳氏の『徒然草評釈』十九には、次のようにある。

寿命院抄以来旧注の諸注は秦中吟の詩句を「夕陽愛子孫」として引く。諸抄大成架蔵本には、朱で「観心略要集、夕陽憂子孫」との書入れが存する。諸注集成によれば、元禄十四年刊の徒然草集説（閑寿青木鷺水）でも観心略要集を典故として挙げ、「憂子孫」としているという。

以上を総合すると、次の三点が問題となる。一つは、兼好が依拠した原典は『白氏文集』なのか、それとも『観心略要集』なのかということ。もう一つは、たとえばこれらの原典によったにせよ、兼好が読んだ原文では「夕陽愛子孫」となっていたのか、それとも「夕陽憂子孫」となっていたのか。さらには、もし兼好が「夕陽憂子孫」の形で読んだとすれば、なぜ徒然草では「夕べの陽に子孫を愛して」となっているのか。これらの問

題について久保田淳氏は、『徒然草評釈』十九で次のように述べている。

この部分に関していえば、兼好は観心略要集をも読んでいたかもしれないが、白氏文集を出典として挙げることは正しいと考える。「憂」を「愛」としたのは、記憶違いではなく、意識的な改変であろう。

ただし、徒然草の他の箇所でも著名な原典を改変した例があまり見られないので、ここを兼好が意識的に改変する可能性は少ないのではないだろうか。したがって、兼好の目に触れた『白氏文集』が「夕陽愛子孫」という形だったのではないかと推測したい。先に引用した幸隆本徒然草の書き入れ注も『寿命院抄』も、「夕陽愛子孫」の形で挙げている。幸隆本徒然草と『寿命院抄』で「憂」でなく「愛」となっているのが、徒然草の表現に引かれてのことでないとするれば、当時このような形で『白氏文集』の詩句が流布していたことを示しているのであろう。

『白氏文集』のこの部分が「憂」か「愛」かは錯綜していたようで、『源氏物語』の注釈書でも両方の形が見られる。そもそも『源氏物語』の注釈書にこの詩句が出てくるのは、夕顔巻の「朝の露にことならぬ世に何事貪る身の祈りにかあらんと聞き給ふ」に対する注釈で取り上げられるからである。たとえば、この部分に関して、古く『紫明抄』では、「朝露貪名利、夕陽愛子孫 文集秦中吟」とあり、『河海抄』では、「朝露貪名利、夕

陽愛子孫 白氏文集秦中吟」となっている。ただし、『岷江入楚』と『湖月抄』所引の『河海抄』では、「憂」ではなく「愛」となっており、その錯綜ぶりが窺える。また、『萬水一露』では、「朝露貪名利夕陽愛子孫 白氏文集秦中吟」となっている。ここで「貪名利」となっているのは異文ではなく、「貪名利」の誤記であろう。「貧」と「貪」は字体がよく似ているので間違えたと考えられる。

『源氏物語』の注釈書を読み合わせてみると、「夕陽愛子孫」という形で伝わっていた『白氏文集』の「秦中吟」もあつたことがわかる。したがって、徒然草第七段で「夕べの陽に子孫を愛して」という表現になっているのは、兼好の記憶違いや意識的な改変ではなく、兼好が読んで記憶していたのが、「夕陽愛子孫」という形の本文の『白氏文集』であつたと考えたい。しながら、それではなぜ『観心略要集』ではなく『白氏文集』の方を出典とすべきかという疑問がまだ残っている。

『観心略要集』の本文がすべて「愛子孫」に統一されているのならば、第七段の出典として『白氏文集』よりも可能性が高くなるが、先にも触れたように、『観心略要集』の本文でも「愛子孫」の「愛子孫」の二通りある以上、出典を『観心略要集』に限定することはできないだろう。つまり、『白氏文集』と『観心略要集』の可能性は、本文表記から考える限り五分五分である。しかも『観心略要集』のこの部分の出典がそもそも『白氏

文集』の「秦中吟」であると思われるから、徒然草第七段で兼好が、「夕べの陽に子孫を愛して」と書いた時に、彼の脳裏をよぎっていたのは『白氏文集』であると考えてまずまちがいはない。それでは一步進めて、兼好がなぜ『白氏文集』のこの箇所を印象深く記憶していたかを推測してみよう。

ここに『源氏物語』を介在させると、どうなるだろうか。『寿命院抄』の注釈には、『源氏物語』との関連やその注釈書による注釈が非常に多い。これは、『寿命院抄』全体を通して言えることであり、『枕草子』や『八雲御抄』による注釈が徒然草の上巻に集中していることと対照的である。つまりこのことは、徒然草にはそもそも『源氏物語』との関連箇所が多いことを示している。『源氏物語』を詳しく読み込んでいた兼好にとって、夕顔巻の一節は周知の表現であつたろう。だからこそ、その部分の出典としての「秦中吟」が兼好には意識され、第七段でみずからの表現に使用したのではないだろうか。

『源氏物語』経由の『白氏文集』は第七段に限らない。『寿命院抄』の第八段の注を見てみよう。『寿命院抄』では第八段の書き出しの部分に対して、次のような注を付けている。

世ノ人ノ心マドハス事……

源氏手習二人ノ心マドハサムトイデキタルカリノモノ
ニヤトウタガフ

海ニ仮色迷人猶若是真色迷人応過此 白氏……古塚狐

これは、徒然草第八段の「世の人の心惑はすこと、色欲にはしらず」に対する注である。『源氏物語』手習巻を引き、その部分に関する『河海抄』の注を書く。現代の注釈書では、この部分について、『源氏物語』を引用するものは管見には入らなかったが、『新日本古典文学大系』の『徒然草』（久保田淳氏校注）では、第八段の末尾の「外の色ならねば」の脚注に、上記の『白氏文集』の「古塚狐」を掲げる。なお、『寿命院抄』では「外の色ならねば」の部分について、「外ヨリカザリタル、カリノ色ナラヌト云義也」と注して意味をやや詳しく説明するだけで、「古塚狐」には触れていない。

次に第九段で『寿命院抄』が『河海抄』を引用しているのは、「ケハヒ」の語釈に関してである。

ケハヒ、気ケハヒ 河海 日本記 形勢、新猿楽記景気

この注は単語の列挙でややわかりにくいだが、『河海抄』を参看してみるとよくわかる。

帚木巻の「じねんにそのけはひ」の部分の『河海抄』注に、「気日本紀 形勢新猿楽記 景気」とある。つまり、『日本紀』では「気」という漢字に「ケハヒ」という読み方が付いており、「形勢」は『新猿楽記』にあり、もう一つの例として「景気」があるという、三例が挙げられている。「景気」の出典は書かれ

ていない。したがって、『寿命院抄』の注は本来、「ケハヒ 河海 気ケハヒ日本記 形勢新猿楽記 景気」のように書かれてしかるべきところである。この順に書かれていないので、わかりにくくなったのである。

最後に、徒然草第九段に対する『寿命院抄』の注で、引歌が二首挙げられている部分を考えてみたい。一つは「ウチトケタルイモネズ」の部分に、「拾遺引」として、「君コフル涙ノカ、ル冬ノ夜ハ心トケタルイダニネラレズ」という和歌が引用されている。なぜこの歌を例示しているのだろうか。この歌は、『源氏物語』の空蟬巻の引歌とされる和歌である。『河海抄』では「心とけたるいだにねられずなむ」について、「君こふる涙のかゝる冬の夜は心とけたるいやはねらるゝ 拾遺」と注する。また、『紫明抄』では同じところの注に「君こふる涙のこほる冬の夜よは心とけたるいやはねらるゝ」という形で書かれており、『河海抄』とは二句目が異なる。

この歌は『拾遺和歌集』巻第十二・恋二・七二七番のよみ人知らずの歌で、「君恋ふる涙のこほる冬の夜は心とけたる寝やは寝らるゝ」が正しい形である。『紫明抄』はこの形で引用していたのである。『寿命院抄』でこの歌の二句目が「涙ノカ、ル」となっているのは、『河海抄』での引歌と同様である。このようなところからも、『寿命院抄』の注釈と『河海抄』の密接な関連が

わかる。

徒然草第九段におけるもう一首の例歌は、「カノマドヒトハ、色欲ノマドヒ也」という説明に続けて、「イカ斗恋ノ山ヂノシゲ、レバ入トイリヌル人マドフラン」という歌が掲げられている部分である。この歌の出典は書かれていないが、これは『古今六帖』第四・恋・三二八三番の「いかばかり恋てふ山の深ければ入りと入りぬる人まどふらん」である。『寿命院抄』の引用では二句目と三句目が「恋ノ山ヂノシゲ、レバ」となっており、異なる。この歌も『河海抄』において、胡蝶巻と若菜下巻の注に引用されている。そこでは「いかばかり恋の山路のしげゝればいりと入ぬる人まどふらん」という形で記されて、『寿命院抄』と同じである。『源氏物語』の注釈書においてこの歌の場合は、「恋の山路のしげゝれば」という表現で引用されることが多いので、『寿命院抄』の引用が必ずしも『河海抄』に直接よっているとは断言できないが、他の箇所と考え合わせると、これも『河海抄』によった可能性が高いのではないだろうか。

おわりに

本稿では、『寿命院抄』の注がどのように付けられているかをめぐって、『八雲御抄』『枕草子』『源氏物語』による注を具体的

に考察した。これによって、『寿命院抄』は徒然草の最初の注釈書であるにもかかわらず、なぜ出典の探索や引歌などを詳しく注釈することができたのかという疑問に対して、いくつかの解答を得ることができたと思う。

まず第一に、『寿命院抄』の引歌の多くは、『河海抄』を中心とする『源氏物語』の注釈書によっていることがわかった。『寿命院抄』でこれらの歌は、歌集や作者に触れずにただ和歌だけを挙げているので、独自の視点から徒然草の表現について、それにふさわしい和歌を捜し出して書いているように見えるが、それらを『源氏物語』の注釈書の中で探してみると、ほとんどが『源氏物語』の注釈書が指摘していた引歌である。このことは、『寿命院抄』が徒然草の注釈を行うに当たって、『源氏物語』の注釈書を大いに参考にしたことを示している。

そして、この事実が判明したことによって、そもその徒然草自体が、いかに『源氏物語』の語彙によって書かれているかということ、および、いかに徒然草が『源氏物語』の場面を念頭に置いて書いているかということがわかってくる。

また、徒然草の語彙に関しては、『寿命院抄』は『八雲御抄』によって説明することが多く、それらは特に徒然草の上巻に集中していることから、徒然草上巻では、和歌の表現によって書かれている部分が多いこともわかった。

さらに、『寿命院抄』の注の中で『枕草子』に言及している箇所

所は、徒然草の書き方と『枕草子』の類似性を明確化するものであり、『寿命院抄』の徒然草観が、正徹の系譜を継ぐものであることもわかった。

このように、『寿命院抄』における注の出典に注目することは、とりもなおさず徒然草自体の作品世界の解明に繋がってくるということがある。本稿で取り上げることができた注はごくわずかであり、特に『源氏物語』の注釈書については、第九段までしか辿れなかったもので、今後もこのような視点から、研究を続行したい。

付記 本研究は、平成十年度放送大学特別研究費による研究成果の一部である。

(平成十年十一月五日受理)

注

- (1) 拙稿「徒然草注釈書の世界―近世以降―」(『国文学解釈と鑑賞』・至文堂・平成九年十一月号)
- (2) 『寿命院抄』の引用は、川瀬一馬解説『徒然草寿命院抄』(松雲堂書店・昭和六年)によるが、清濁・句読点・表記等改めた箇所もある。また、古澤貞人著『徒然草古注釈集成』(勉誠社・平成八年)も参照した。
- (3) 『八雲御抄』の引用は、久曾神昇編『日本歌学大系 別巻三』(風間書房・昭和五六年)により、『河海抄』および『紫明抄』の引用

は、玉上琢彌編・山本利達・石田穰二校訂『紫明抄 河海抄』（角川書店・昭和四三年）による。

(4) 徒然草の本文の引用は、西尾実・安良岡康作校注『新訂徒然草』

（岩波書店・一九九一年）によるが、表記等改めた箇所もある。

(5) 『新編国歌大観』（角川書店・昭和五八年）による。

(6) 『徒然草大全』の引用は、『徒然草文段抄』（日本図書センター・昭和五三年）所引による。

(7) 安良岡康作著『徒然草全注釈』上巻（角川書店・昭和四二年）四五ページ。

(8) 『萬水一露』の引用は、伊井春樹編『萬水一露』（桜楓社・昭和六三年）による。

The Annotation of Tsurezuregusa-Jumyōinshō

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

This paper aims to survey the annotation of Tsurezuregusa-Jumyōinshō. Tsurezuregusa-Jumyōinshō is the first notes of Tsurezuregusa. This book plays an important part in the study of Tsurezuregusa.

Many notes of Tsurezuregusa from Edo-period to our own day follow the explanation of Tsurezuregusa-Jumyōinshō. This book explanates characters names of Tsurezuregusa and traces quotations to their original sources.

Tsurezuregusa-Jumyōinshō clears that Tsurezuregusa quotes many famous phrases from Genji-Monogatari, Makura-no-sōshi and Waka. We understand that Tsurezuregusa is based on the Heian period literature.